

論文要旨

二元的性別概念再考

——Xジェンダーにおける性自認過程と身体像をめぐって——

国際社会科学専攻 関連社会科学分野

31-166603

佐川魅恵

2000年代始めころからその存在が知られるようになった、「Xジェンダー」とは、女性／男性という二元的な性別の感覚を持たない、あるいは持ちたくない人びとを指す日本独自の言葉である。本稿では、Xジェンダーを対象に行なったインタビューから得られた語りをもとに、かれらがこの性別二元論の根強い現代社会で、どのようにして「男でも女でもない」アイデンティティを作り上げ、いかにしてそれを表出するのかを明らかにする。Xジェンダーであるかれらの実践は、既存のジェンダー・セックス・セクシュアリティ概念の相互関係を理解する上で重要な視座を提供するとともに、性別二元論を再考することを迫るものである。

第1章では、このような問題関心の前提となる、二元的な性別概念の歴史的形成、すなわち性別二元論的な発想がいかに形成され、それが特定の身体的特徴とどのように重ね合わされていったのかを明らかにした。現在の医学的・法的な「性別」は生物学的に決められ、「男」と「女」の二種類しかない。しかしこの身体観は18世紀以前には存在しなかった。それ以前は、男と女の身体は本質的には同じであるとみなされた。このような身体観はギリシアの医学者ガレノスによって確立され、16世紀にヴェサリウスによって人体を「ありのままに」捉えようとする近代解剖学が成立しても変わることはなかった。このことは、実際にわたしたちに「見えている」と思われる事柄それ自体が、いかに文化的な影響を受けて形作られるものかを示している。他方、時代が下ると次第に二分的な性モデル（ツーセックス・モデル）が支配的になり、積極的に身体的特徴による区別がなされるようになっていく。しかもその実践は、両者の医学的で「根本的な」差異を、「劣った女性／優れた男性」という優劣の意味の振り分けの根拠づけのために絶えず利用されていった。女性と男性はただ単純に「違う」と見なすニュートラルな科学的医学的知見はほとんどみられない。実際にはこの生物学的差異の発見・説明は、女性を劣位に置く社会的営みを駆

動することに加担していった。ここでは科学的思考形式と性別の社会的意味に関する想定が、後者に依拠する形で一致していく過程がみてとれる。その手がかりとなったのが、身体的情報としての性器や乳房、皮膚なのであった。

続く第2章では、前章での歴史的概観から確認された医学的・科学的知見と二元的性別の漸次的一致がもたらした社会的効果について検討している。2.1では、性同一性障害の事例から、日本において「性別を変更する」ということがどのように行われているのかを確認することにより、医学における性別変工と法における性別変更が強固に結びついているということが示される。そのことは「生物学的性別＝社会的性別」という図式を生み出すと同時に、その構図を強固に維持するよう働いており、それに乗ることのできない人びとの排除を生み出している。2.2ではインターセックスの性別決定についての医学的処置と性別訂正についての法的な処置を確認し、性同一性障害では身体の外見のみが重視されるのに対して、性分化疾患の場合は、ホルモンや遺伝子を含めたより広範な「科学的性別」とも呼べるものによってそのあり方が規定されているということが明らかとなる。このことは社会的性のあり方が、より科学的な「証拠」によって固められた身体に基づいて規定される危険をはらんでいることを示唆している。2.3では、西欧近代社会とは異なる文化において、一般的な「男」「女」のカテゴリーに当てはまらないものが社会的承認をえられるのはどのような論理によるものなのかが示される。ここでは、人類学で「第三の性」とも呼ばれるヒジュラとチャラバイに着目する。両者はかれらが属する文化において社会的に認められた「男でも女でもない」存在であるが、その性のあり方は対称的である。ヒジュラがヒジュラとなるためには去勢儀礼を経なければならない。つまり身体変工が必須の条件なのである。そして女神の帰依者として、つまり聖職者として俗世の外におかれることとなる。一方でチャラバイにとって身体変工することは必ずしも重要なことではない。なぜなら、かれらの生きるブギス社会においては、社会的性別はその心の有り様で決められるからである。したがって「女の心」をもつと考えられているかれらは、女性としての役割を求められることになる。しかし、このことからブギス社会を多様なジェンダーのあり方を認める進んだ文化とすることはできない。ブギス社会では心のあり方は女か男の二種類しか存在せず、その性のあり方は性別二元論に回収させられてしまうからである。以上のように第2章では、特定の社会において逸脱した存在とみなされている性のあり方が、二元的性別の振り分けというメカニズムに結びついていることが明らかにされた。これはXジェンダーと性別二元論を考える上で有効な視座を提供してくれる。

以上をふまえ、後半では21名のXジェンダーへのインタビューから得られた語りの分析を行う。第3章では、「Xジェンダーであるということ」をめぐって、性別違和の過程や他の性自認との差異、コミュニティでの自身の位置付けなどが議論される。3.1ではかれらがXジェンダーになるきっかけとも言える性別に対するさまざまな違和感について、身体に対する違和感・異性役割への欲求・社会的性役割に対する嫌悪・同性愛的指向の4つに分け、それぞれの代表的な語りの分析を行った。続く3.2「Xジェンダーであること」では2つのことが明らかになった。第一に「Xジェンダー」というカテゴリーは排他的な定義として、それ用いるひとたちにとり、かれらにとっての「トランスジェンダー」や「性同一性障害」な

どとの差異化戦略に活用されている。また第二に、そのための具体的な実践としてトランスジェンダーとは異なる異性装や、暫定性をはらんだ自認という実践がある。3.3では社会関係を構築したり性愛関係を取り結ぼうとするものの困難さ（や不可能さ）が明らかとなる。Xジェンダーを自認する人たちはそれぞれその場に沿った方法で関係構築を目指す、その自認やセクシュアリティの多様性ゆえに、他にはみられない「つながり」のあり方を模索している。

第4章は、Xジェンダーと二元的性別概念の関連をさらに掘り下げるため、4.1ではXジェンダーという性自認形態と二元的な性愛観との結びつきを、4.2では二元的な身体観との結びつきを、4.3では二元的な性愛観と身体観のからまり合いとの結びつきについて分析した。4.1：既存の性の認識枠組みでは、「多様な性」は生物学的性別（身体的性別）・性自認・性的指向をそれぞれ男女という二つの性別に振り分けた上で、それを組み合わせることで理解されている。これは特に性愛関係においては「異性愛か同性愛か」という二択を迫るものである。このことはXという性自認が導く性愛のあり方が圧力のもとにさらされ、阻まれかねないことを意味し、逆に二元的な（2×2×2の）概念構成による「性の多様性」のリアリティを顕在化する。4.2：Xジェンダー概念にそれによって可能になっているもののひとつは、「…でない」という否定の累積を明確化することだが、それが具体的に遂行される場面にさまざまな身体表現がある。例えば男性身体をもつXジェンダーであるひとが女性の服装をするのは、女性になりきるためではなく、まさに女性の格好をすることによって、身体上の男性性と女性性を中和させ、個々人の感覚に沿ったXジェンダー「らしさ」を身体表現によって備給するためである。4.3：物理的な身体と区別されたイメージとしての身体を想定した場合、性交渉をはじめとする性愛は、その像を構築する強力な要素となる。性愛において強烈に身体が二元的にジェンダー化されてしまうとすると、そもそも他者に対して恋愛感情や性的欲求をもたない場合、逆に性的指向と性自認の「…でない」が結合し自己のジェンダーが曖昧になるような契機が生まれうる。この解釈はXジェンダーの中に「アセクシュアル」というセクシュアリティをもつ人が多いことと符合する。

本稿で歴史（第1章）や逸脱（第2章）、そしてXジェンダーの語り（第3章・第4章）から執拗に論じてきたのは、生物学的性や性自認、性的指向のそれぞれに効いている「男／女」という二元的な性別概念が生じた軌跡と、それをを用いるさまざまな実践である。トランスジェンダーやインターセックス、非西洋世界における「第三の性」らは、既存の「性概念にあてはまらない」——すなわち「男」でも「女」でもない——、だからこそ二元的な性別を疑うことができ、それを超えうる存在であるとみなされる傾向にあった。それに対して本研究が意図し、実際に示したのは、Xジェンダーの分析を通してこの二元的性別概念を「再考」すること、すなわちいかなる瞬間にこの概念ペアが人びとの思考や振る舞いに効いているのか、そしてそれによってどう特定の思考や振る舞いが方向づけられているのかを知ることであった。

Xジェンダーの語りの中に二元的性別概念という、つねにすでに埋め込まれている（歴史的に埋め込まれていった）思考前提について、文字通り「再考」すること、すなわち、Xジェンダーという性自認、性的実践のありかたを外部的・他者化することなく、既存の構造に関連づけて理解しようとする、それが本稿が試みた「中範囲の質的調査」である。